

● ポストコロナと南部町

新型コロナウイルス感染症対策のため、町では「今、困っている人を、今、支援する」を掲げ、令和2年度には第1弾の「飲食業者緊急対策支援金」から第5弾の「特別プレミアム商品券」まで、大きく5つの対策を、他町村に先駆け、スピード感を持って実施してきました。

地方創生臨時交付金として約4億8000万円を充当していますが、特に7月の第3弾では、「農畜産業先行型持続化給付金」として約2億3230万円を給付し、町の基幹産業を守ってきました。今後とも、推移を見ながら、全業種にバランスよくタイミングを捉えた対策を講じていきます。

この一連のコロナ問題と対応で、大きな時代の転換点が見えてきました。一つは大都市の感染拡大による「都市集中型」社会の弱点と、持続可能性からの「地方分散型」社会の必要性が認識されたこと。もう一つは経済や社会のデジタル化が一気に進んだことです。

これを「第4次産業革命」と指摘する専門家もありますが、ポストコロナは、地域にある価値を再確認し、内外にある新しい方向性と結びつける力の実現に向けていけるかどうか重要です。



【町長メッセージ】

心のキャッチボール対話で

南部町長 工藤祐直

● 移住・定住対策と人口の定常化

地方の大きな問題が人口減少であることは、南部町においても変わりません。そのために移住・定住対策や、子育て支援の充実

を図ってきました。

例えば「空き家バンク等利活用促進」では、住宅資金として空き家改修費を支援し、入居希望者が増加しました。また、移住の不安要素に「コミュニティに馴染めるか」が多いようですが、空き家改修を地域住民の協力を得て一緒にできれば、早く馴染めるようになるのではないのでしょうか。

南部町では町内会活動が活発です。私も清掃作業や小さな地区の祭りに参加したりしますが、和やかな温かさがあります。役場からは地域担当職員が地域の要望を伺い、早急に横断的に対応しています。その他、趣味のサークル活動もたく

プロフィール——工藤祐直（くどう・すけなお） 昭和30年（1955）、青森県南部町生まれ。明治学院大学法学部を卒業後、民間企業を経て旧名川町役場に入庁。その後、平成11年（1999）に旧名川町長に就任、平成18年に合併による新生南部町の初代町長に就任し、現在通算6期目。



さんあります。

住宅関連で言えば、若者向け住宅として整備した「チエリータウン桜場」は、剣吉駅前という好立地と、扶養する18歳未満のお子さん1人につき10%、さらに町外から転入する60歳未満の方は50%割引の特典があり、全39区画が完売しました。

今後、最も大切なのは人口減少をゆるやかにしていく、定常化していくことだと思います。それには住んでいる人々の満足度が肝心ですが、では、南部町の本当の魅力とは何でしょうか。

● 達者村コンセプト

南部町には農村としてのコミュニティの伝統、食文化や農耕習俗としての伝統芸能等々、大切な郷土の誇りが継承されています。その魅力を形にしたのが、南部町のシンボルでもあるバーチャル・ビレッジ「達者村」です。平成5年（1993）に旧名川町に始まったグリーン・ツーリズムを継承し、平成16年（2004）に開村した息の長い活動は、「おもてなしアワード2018」で県知事賞を受賞するなど、高く評価されています。

キャッチフレーズは、「友（ゆ）／＼つたり遊（ゆ）／＼つくり 農（の）／＼んびり」で、その土地固有な風土や住民のライフスタイルそのものに触れる喜びを感じてもらい、来



竣工した南部町役場新庁舎テラスで

訪者も地域住民も達者になろうという願いが込められています。やがてそれは確実に南部町ファンを育て、将来的な移住・定住につながっていくでしょう。

● 新しい人々と共に歩む

新型コロナウイルスの流行によって、テレワークやオンライン授業などが日常になり、「10年かかる変革が数カ月で進んだ」と言われるように、デジタル化する世界を加速させました。これを新たなビジネス機会ととらえ、販売形態を替えて成功する例も増えています。

ただし、グローバルな面と、私たちの身近

な暮らしの両面で、人間にとって何が大切なのかを改めて考える機会にすることが必要です。

私は常々、町政の基本は成長過程に従い、大きく分けて①教育（学び）②経済（仕事）③医療・福祉（社会保障）の3つを充実させることと思っています。木が芽吹き、幹が枝を張り、やがて豊かな南部の森になるような町政を心がけてきました。

ポストコロナでは、一過性ではない「新しい生活様式」を創造していかねばなりません。しかもそのレベルは新しい価値観の創造を視野に入れなければならないほどの、時代性を有するものです。今回の町勢要覧のメインタイトルは、『新しい人々』としています。本文では南部町の自然・土地柄、歴史や文化を守りながら生きてきた人々と、南部町を自分の居場所と定め、移住・定住してきた人々とのつながる姿を、「新しい人々（南部人）」として紹介しています。

私はそのような人々の郷土愛を誇りに、これからも心のキャッチボール対話をしながらか、共に歩んでいきたいと思っています。